悔やまれる広島の救援活動

語り手　城所　太美二
松ケ丘一丁目

私は、一九二六（大正十五）年二月二七日、中野区に生れ、育ちました。私は軍隊による救援活動で広島市に入り被爆しました。国家補償にもとづく被爆者援護法が早く実現する力になればと思い、私の被爆体験を話します。

原爆投下をこの目でみた

私は一九四五（昭和二〇）年四月二五日、十九歳の現役兵として陸軍船舶機関砲第一連隊（広島県福山市）に入隊しました。そして、三〇日に広島市の東、向洋（むかいなだ）に派遣され、三一日にその高射砲陣地（高さ約二〇〇メートル）の部隊に入りました。爆心地から東へ約四キロメートルのところです。

中国地方は毎日のように空襲を受け、空襲警報が鳴れば陣地につかなければならないので、一九四五（昭和二〇）年八月六日も上官と陣地に登りました。そこは、まるで原爆投下の見物席のようなものでした。

空襲の警戒警報が解除されたのに、アメリカの爆撃機B29が一機だけ飛んできました。アルミ製のような物体がキラキラと光り、なにかがプラプラ落ちてきたのです。「また、『降伏しろ』というチラシでも撒いたのか」と思いました。

落下物ばかり見ていると怒られるので、下を向いた瞬間、「パッ」と光ったのです。原爆投下の午前八時十五分、その時です。すこし熱いものを感じ、水平線に沈む太陽よりも大きいかたまりを見たような気がします。「あッ」と言った途端に、「ドカッ」というすごい音がして、体は四、五メートルはね飛ばされました。

その音は、まるで耳元でピストルに撃たれた時よりも大きな音でした。陣地の裏にある工場のガラスも割れました。広島市内にすごい煙がたち、赤、黄、青、紫、ものすごい色が煙の中に見えます。その煙は何千メートルもの高さに昇って行きました。

部隊の内務班は、八月六日午後には被害者の救援に向かいました。私たちの班の約七〇人は二日後の八日、爆心地から南東約二キロメートルにある比治山（ひじやま）に向かいました。途中、服が破

れ、皮膚がベロベロになりはがれた人がヨタヨタと歩いてきました。広島市内に近づくにつれ、街の様子がひどくなっていきます。広島駅の南側の町を通り、猿猴川を渡ったのでしょうか。このあたりは投下の二、三日前までの一週間、建物疎開の作業をしたところです。私たち兵隊が家をノコギリで切り、近所のお母さんたちが縄をかけ「ワッショイ、ワッショイ」と言いながら引っ張り、次々と家を壊していきました。部隊に帰れば、演習などで「絞られる」から楽しいものです。休憩中に、きれいな川で泳いだこともありました。そして疎開作業中の夜は、壊す前の家を宿にしました。

しかし、そのあたりは多くの焼け死んだ遺体がありました。真っ黒こげに焼け、お腹がブクーと膨らんでいた母親は、赤ちゃんを抱き母乳をやっている姿のままで死んでいました。橋の上には、十五、十六歳でしょうか、勤労奉仕にでた挺身隊の女生徒が何十人と焼け死に、倒れ、橋一面を埋めていました。

赤ちゃんや女生徒たちは生きていたかどうかわかりませんが、今思うと、ほったらかしにしたことは情けないと思います。

子どもの死体をぶん投げた

比治山にも真っ黒こげになった死体がたくさんありました。死体処理、負傷者の手当が目まぐるしくすすんでいきます。けが人を担架で運ぶのですが、二、三日もすると疲れてきました。そこで今度は担架を肩に担ぎました。すると頭が腐り、ウジがわいているのが目の前に見えるのです。気持ち悪く、「今度は足の方を持って運ぶ」というと、相手と喧嘩にもなりました。

いちばん悔やまれるのは防空壕の中で死んでいた子どもたちの死体を、片手で三人ぐらいずつ腕をつかみ、比治山のふもとまで引きずり、ぶん投げたことです。

火葬にするためです。子どもたちは五、六歳だったでしょう。防空壕の中に多くの焼死体があり、子どもたちは後から入ってきた大人に押しつぶされたのか、圧死で火傷一つありません。死体やけが人を防空壕から出すのはたいへんです。上官は作業をほとんどしません。私たち新兵がやらされました。人数も少ない。だから、死体の片付けが間にあわない。大人だと担架で運びますが、子どもは面倒くさいと、若さにまかせてひどいことをしてしまいました。なぜ、一人一人ていねいに運んであげられなかったのか。一人一人抱いてやればよかったと、今思います。

防空壕の中には生きている人もいました。負傷した人を担架で衛生兵の所に運びましたが、途中で死ぬ人もいました。すると「死体をもってきたのか」と上官に蹴り飛ばされたこともありました。仕方ありませんから、虫の息の人は後回しにして冷たくなってから運びました。

火傷した人には、バケツに入った白っぽい薬をはけで塗りました。化膿止めの注射は数が少なく、衛生兵は女性ばかりに打

ちました。油の薬と、火傷の膿(う)みの匂いが混ざりあって臭い。ごはんは、たまにはバケツで持ってきますが、死骸、火傷、ウジ、悪臭、そして手は塗り薬がついてベトベトです。その上暑い。とても食べられたものではありません。食べられないから水ばかり飲む。水が悪かったのでしょうか。徴兵検査で甲種合格の私も救援作業中に下痢が続き、体重は四日間で六〇キロが四五キロに減りました。

甲種というのは、十人に一人ぐらいしか選ばれません。背丈、体重が十分あり、健康で近眼もない。銃の引き金にかける指に少しでも傷があっても甲種合格にはなりません。そんな体が丈夫なはずの私でも、下痢が一か月も続きました。鳥目になった戦友もいました。

こんな、恐ろしい戦争は悔しくてしょうがない。ただ、恐ろしかった。あれが「この世の地獄」というものでないのでしょうか。恐ろしいものを落とされたものだと思いました。

八月十五日、戦争は終りました。私はその時、悔しいけどホッとしました。若さゆえなのか、希望がありました。焼け跡を通っても悲観的な感じはなく、平和がきたと思いました。もう二度と兵隊に取られなくていいという安堵感がありました。

八月十九日に福山の原隊に帰りました。そこには、被爆し、顔にウジがわいたままでも平気な兵隊もいました。ウジが火傷の膿みを食べてくれるからでしょう。九月八日除隊し、中野区に帰りました。今の中野区松が丘の家は空襲で焼け、トタン屋根のバラックに変わっていました。

いまも体がフラフラする

被爆後から続いている病状があり、今も薬を飲んでいます。長く立つことができず、体を支えるためには何かにつかまらなくてはならないのです。一九六〇（昭和三五）、一九六一（昭和三六）年ごろがいちばん体調がひどかった時です。会社勤めで、鉄の工作や溶接の作業をしていましたが、貧血がよく起こり体がフラフラしました。朝も起きられなくてよく遅刻しました。病院にいっても原因がわかりません。めまいの薬をもらうだけでした。

私は一九五七（昭和三二）年、三一歳で結婚しました。そして、翌年から一年半から二年おきに一人ずつ子どもが生まれ、四人の子どもの父親となりました。私は、娘三人、息子一人、そして妻と祖母という家族六人を養わなければならないにもかかわらず、体調はすぐれませんでした。だから、十二年間勤めた会社をやめ、時間が自由になる自分の会社「城所工業所」を、一九六八（昭和四三）年に始めました。朝十時まで起きられない日が何年も続きましたが、張り合いもありました。四人ぐらい職人を使い、仕事も順調にすすみました。今、工場は練馬区の大泉に移り、長男が後を継いでいます。

子どもが成長するまで不安だった

妻の出産の時、私は一人で悩みました。まわりの人は私が被爆者だと知らないため、「被爆者には奇形児が生まれる」と話していたからです。妻は私が被爆者だとは知りませんでした。妻に被爆体験を話したのは十年前のことです。いちばん下の子どもが二〇歳になった時で、みんな無事成長してからでした。それまでは怖くて話せませんでした。

私が被爆者健康手帳を取ったのは、一九九三（平成五）年二月二六日です。それは、私が入っている「東京土建」（建設産業で働く仲間の組合）で、一度被爆体験を話した時に、その組合の知人にすすめられたからです。その知人は胎内被爆者です。抵抗はありました。被爆者だというレッテルを貼られるのはいやでしたから。

体験を話せるようになったのは、ある演芸人も比治山で被爆し、頭の皮がめくれるほど大火傷をしたけれども、息子は立派に育っているという話を聞いて、安心したからです。

戦争を起こさないために人間愛を

私は二度と戦争を起こさないために、原爆の恐ろしさを少しでも皆さんにわかってもらえるように努力したいと思います。私が死んだ子どもたちにしたように、戦争の中では人間らしい気持ちは失われてしまいます。

若い皆さんには、戦争を起こさないために、人間愛を心がけてほしい。それが一番大切なことだと思います。いちばん恐ろしい戦争が起きてから人間愛に気づいても遅いのです。

本当は広島のことは思い出したくありません。思い出すのは本当につらい。広島の子どもには何の罪もありません。本当にかわいそうでした。今、子どもたちが生きていれば、たぶん、五〇代になり仕事でも中堅になって働いているでしょう。

被爆五〇周年である今年、一九九五（平成七）年には広島に行き、子どもたちに謝りたいと思います。

聞き書きを終えて

私は、この活動の初回ということもあり、城所さん宅へ訪問する日、かなり緊張していた。しかし、迎えてくださった城所さんのこわばった固い表情を見た時、城所さんのある〝決心〟を感じ、改めて背筋を伸ばした。

城所さんは兵隊として広島へ赴き、原爆投下の二日後には救援活動のため、焼け野原へ入り、被爆された。

まず私はこの事実に衝撃を受けた。私は被爆者（イコール）＝広島県出身者または、住人と思い込んでいたからだ。城所さんは、生まれも育ちも中野区で、それまで広島とは縁もゆかりもなかったのだ。全く、私の認識不足であった。

城所さんは、人間の姿とは思えない遺体、怪我人のいる、全く機能していない町、氏の言葉を借りれば〝この世の地獄〟で救援活動を始めた。城所さんは、防空壕で圧死した子供を荒々しく扱い「ぶん投げた」ことを思い出し、口に出すたびに、嗚咽をもらし、涙をぬぐった。「なぜ、もっと丁寧にしてやれなかったのか。」、城所さんは、悔やんでも悔やみきれないといった様子であった。これこそ戦争を起こすことと対極した人間らしい温かい気持ちだと思った。城所さんの、罪の意識にも似た後悔の念は、人間誰しも本来持っている愛情ゆえに起こるのだと思う。それを失ってしまう程、広島は悲惨だったのだ。その状況で、がむしゃらに働いてくれた城所さんをはじめとする多くの人々に、私はむしろ感謝したいような気持ちになった。

終戦の日、城所さんは悲しみより将来への希望に満ちていた、と言う。戦後、原爆のせいかと思われる後遺症に悩みながらも家族を養い働き続けた。私は城所さんの底力、精神力を感じた。深い悲しみや苦しみを背負っても、希望を持ち生きていく、人間の強さを学んだような気がする。そして、私達若者がこのような強さを、戦争でなく平和の創造のために発揮できるよう、また戦争を単なる昔話にしたり、風化させないため、私達自ら〝戦争〟を知ることが責任であり、義務であるのだと強く感じた。

原　幸恵

城所さんの体験を聴いて、原爆当時の惨状よりなにより、今なお、城所さんの胸にうずく傷がある、ということが一番ショックだった。

聞き書き中、私はカメラ係で、城所さんが死んだこどもをどう扱ったかを話すたびに見せるつらい表情を、失礼な話だが、「シャッターチャンス」とばかりに撮っていた。

でもそれは、「写真」という形で、城所さんが今まで、そして

これからも抱えていくだろう原爆による「心の傷」の深さを、多くの人に伝えたかったからだ。いい写真がとれたと思うたびに私も悲しくなった。

戦争は終わったけれど、原爆から五〇年近く経っているけれど、城所さんの中では、多分、多くの被爆者も同じで、まだ戦争は続いている、そんな気がした。

体の傷はいえても、心の傷は治りにくい。そんな心の傷を残す戦争は二度と起こしてはいけない。

大野早苗

八月二十七日は、一回目の聞き書き活動の日でした。私はすごく緊張していました。

十九歳のときは現役兵になっていたそうです。今の若者達には考えられないことだと思います。原爆が落とされたときはなにがなんだか分からなかったのではないかと思います。城所さんは八月六日の午後には救援に向かったそうですが、そのときは原爆というおそろしいものが落とされたことをしらないまま救援活動をされたと思います。『子どもの死体をぶん投げた』ということが悔やんでいらっしゃいますが、それはすべて戦争からはじまったことです。私は世界が平和だったら悔やんだり、悲しんだりすることはなかったと思います。

『人間愛』を大切にと城所さんはおっしゃっていました。私も大切に、みんなも大切にして平和な世界になってもらいたいです。

中学生・女子

城所さんのお宅の一階は作業場です。鉄さびの匂いと、全体に赤茶げた色に包まれていました。私の実家の稼業も鉄工所で、私はこの雰囲気の中で育ちました。注文の品の納期を間に合わせるために何回も徹夜する父親。これは小さい町工場の宿命です。

被爆し体調を崩した中で、家族を養うために「城所工業所」を始め、立派にお子様を育てられた城所さん、そして苦労をともにされた奥様の努力は一庶民の生活かも知れませんが、人生を学ばせます。城所さんが話した広島の地獄、子どもの死体の扱いで悔やまれ続けている苦悩は、あってはならない人の生と死とは何かを気づかせます。原爆許すまじ。

城所さんは、今も薬を飲まれていますが、「長男にはまだまだ工場はまかせられない」と仕事に対する自負を話す姿は楽しそうです。長男が工業所を継いでいるからでしょう。すこしでも「あの日」から引きずる苦しみが和らぐこと、そして、ご健康を願っています。

塚本晴彦
（三二歳）

ちょうど一か月くらい前の八月二七日。五月からの三か月間研修や打ち合わせなどをこの日のためにしてきました。この「聞き書きボランティア」に参加してこの日まで経験不足の自分にきちんとお話を聞いて記録できるか本当に不安でした。

この日にお話を伺った城所太美二さんのお話は、私が初めて聞く言葉、知らない事も多く質問や記録に戸惑うことが何度かありました。でも班のメンバーの方にフォローしていただきスムーズにお話を聞きとることができたのではないかと思いました。

二時間という短い時間の中で私にとって、とても良い経験になったと思います。なんだか私の本当のおじいさんのような感じがして、とても優しい感じの方でした。とても貴重なお話を言いづらいのにして下さったことを本当に感謝しています。また私にこんな経験のできる機会をつくって下さった方にも感謝したいと思います。ありがとうございました。

中学生・女子